

サファヴィー朝の首都と即位式

後 藤 裕 加 子

はじめに

サファヴィー朝は初代シャー・イスマーイール1世（在位一五〇一～一五二四年）が、政敵アク・コムンル朝の諸有力者たちを駆逐し、イラン西北部のタブリーズに入城したことにより成立した。第2代シャー・タフマースプ1世（在位一五二四～一五七六年）はカズウィーンに、第5代シャー・アッバース1世（在位一五八八～一六二九年）は一五九八年にイラン高原中部のイスファハーンへと首都を移した。すでにいくつかの研究が指摘している通り、サファヴィー朝成立以前の同地の統一王朝は遊牧的な性格を強く維持し、それゆえに移動を常として固定された首都を持たず、首都機能を持つ都市に到つても、その郊外に駐留して都市内部には長期滞在しなかった。これに対してサファヴィー朝の場合、「世界の半分」とまで賞賛されたイスファハーンに代表されるように固定的な首都を有し、市内にはシャーにより華麗な宮殿などからなる王宮地区が建設された。首都は同朝の発展や繁栄と不可分の関係にあり、これを前提にして主に建築史や美術史の分野を中心にサファヴィー朝期の都市研究が積み重ねられた。⁽¹⁾

しかし、イスファハーンの名声を不動のものとしたアッバース1世にしても、常に首都で過ごしたわけではなく、

その移動性の高さがすでに指摘されている。⁽²⁾ また、アッバース1世以後のサファヴィー朝後期のシャーたち、例えば第6代シャー・サフイー1世（在位一六二九―一六四二年）や第7代シャー・アッバース2世（在位一六四二―一六六六年）も、ある程度の定住性を嗜好しつつも、やはりイスファハーンを拠点としつつ、旧都タブリーズ、カズウィーンや、アッバース1世時代の後半に冬の首都としての機能を有していたマーズンダーン地方の諸都市との間の移動を行っていた。西の隣国オスマン帝国や東のムガル帝国、ウズベク族との国境地帯をめぐる争いなどの有事に翻弄されたサフイー1世はともかく、比較的安定した長期政権を実現したアッバース2世が移動を繰り返した理由は、必ずしも彼らの遊牧的な心性からのみでは説明できず、首都機能を有する複数の中核都市の間を移動する、サファヴィー朝の統治制度の在り方にその理由を求めるべきであろう。⁽³⁾

シャーは各地を移動する間にも外国使節やアミールとの謁見や任命・罷免などの統治行為を行っており、サファヴィー朝の首都機能や宮廷の移動との関係については、今後詳細に検討されるべき問題であるが、原則的に首都で行われていた王権儀礼のひとつに即位式があった。サファヴィー朝ではタフマースプ1世が第一次内乱を鎮圧し、その統治が安定するに従い、その王権を強化・誇示するための装置が整えられるようになった。その舞台が第二の首都カズウィーンに建設された王宮地区であり、ノウルーズ（新年）の祝祭や即位式は同地区内のチェヘル・ソトゥーン宮殿で挙行されるようになった。⁽⁴⁾

イスラーム世界の王権儀礼についての研究はまだ端緒が開かれたばかりといえる。⁽⁵⁾ 本稿では、サファヴィー朝の初代イスマール1世から、アフガン族のイスファハーン侵攻によって実質的にサファヴィー朝が滅亡した第9代スルタン・フサイン時代（在位一六九四―一七二二年）までの9代のシャーの10回の即位式を検討し、その変遷について明らかにするとともに、その支配制度上の役割について考える手立てとしたい。⁽⁶⁾

第一章 サファヴィー朝初期の即位式

この章ではサファヴィー朝の創設者であるイスマール1世と第2代タフマースブの二人のシャーの即位時の様子をサファヴィー朝の年代記の叙述から検討していくが、それに先だってサファヴィー朝の即位式に観察されると考えられる儀礼の要素をあらかじめ整理しておきたい。それらは大きく以下の三点に分類される。

1. イスラーム的な要素

2. イスラーム神秘主義的な要素

3. 非イスラーム的・世俗的な要素

前近代のイスラーム世界においては、統治の任にあたる世俗の支配者の正当性は、金曜日の集団礼拝の際に礼拝の前に行われる説教フトバによって承認された。政権交代の際には、それまでの支配者の名前に代わって新たな支配者の名前がフトバの中に読まれることによって、これが周知されたのである。また、支配者は貨幣鑄造の権利を有しており、貨幣にその名を刻むことによって時の支配者が誰であるかが明らかにされた。

2については、サファヴィー朝はイスラーム神秘主義のサファヴィー教団を成立母体としており、サファヴィー朝特有の事情として、即位儀礼にイスラーム神秘主義的な要素が入り込む可能性が推定しうる。また、即位式は周囲に新たな支配者を周知し、王権を誇示するための恰好の装置であり、ここにイスラーム以外の様々な世俗的な要素が入り込むことも十分ありえよう。⁽⁷⁾

【表】サファヴィー朝歴代シャーの即位式

	シャー名	即位年	即位都市	死亡地
1	イスマーイール 1 世	907/1501	Tabrīz	Naḥčiwān
2	タフマースプ 1 世	930/1524	Naḥčiwān	Qazwīn
3	イスマーイール 2 世	984/1576	Qazwīn (Čihir-sutūn)	Qazwīn (985/1577)
4	ムハンマンド・フダーバンダ	985/1578	Qazwīn (Čihir-sutūn)	
5	アッバース 1 世	995/1587	Qazwīn (Čihir-sutūn)	Māzandarān
6	サフィー 1 世	1038/1629	Iṣfahān (‘Alī Qāpū)	Kāṣān
7	アッバース 2 世	1052/1642	Kāṣān (Daulat-ḥāna)	Dāmḡān
8	サフィー 2 世	1077/1666	Iṣfahān (Tālār-i ṭawīla)	
	スライマン 1 世	1079/1668	Iṣfahān (Čihir-sutūn)	Iṣfahān
9	スルタン・フサイン	1105/1694	Iṣfahān	

(1) 初代イスマーイール 1 世

すでに述べたように、サファヴィー朝はサファヴィー教団の教主イスマーイールがタブリーズに入城したことにより成立する。これは、それまでイラン北西部を支配していたアク・コユンル朝からサファヴィー朝への王朝交代劇であり、各種年代記においてもイスマーイールのタブリーズ入城はあらたな支配者による同市の占領として叙述されている。サファヴィー朝の初期に関する叙述を含む最も古い年代記である『伝記の友』*Ḥabīb al-siyar* は、次のように記している⁽⁸⁾。

この勝利に支えられたパーディシャー(王)によって定められた詔によって、悪所に勝利の旗が掲げられた。国王の恩恵は、彼の素晴らしき御身に喜びの賜衣を掛けられた。喜びと幸運の地から統治の館 (*dar al-sajjana*) タブリーズに向かい、九〇六年／一五〇一年のある日、心晴れやかに、喜ばしいノウルーズの日のように、吉兆の御方の不死鳥の翼は、国家の命運の前兆をその地域に居を定める者たちに広げられた。世界を飾る面差しの光と暗黒を祓う正義の輝きによって、トルコマーンの圧制

者たちの不正からアゼルバイジャンの地を「解放し」、信仰の民の良心の鏡を輝かせた。幸運なる時刻 (*sa'at-i sa'adati*) に、高みにあつた支配の玉座は、究極の幸運の太陽の到来による至福により至高の天よりも高所に置かれた。……吉兆の御方の即位の初めに、アゼルバイジャンのフトバは十二イマーム派のイマームの名前で唱えるように勅令が出された。(*Habib*, IV, p.467)

いかにもペルシア語の年代記らしい美辞麗句が連ねられているものの、イスマール1世の即位 (*Julius*) についての具体的な情報としてわかることは、即位がおそらくあらかじめ吉兆と定められた時刻に行われたであろうことその他に、新たな支配者を知らしめるフトバがシーア派の十二イマーム派のイマームの名前で行われたことで、これがいわゆるサファヴィー朝によるシーア派の国教化といわれるものである。サファヴィー朝の初代の即位には、イスラームに則った支配位の承認手続き以外に、何ら特別な即位儀礼などがあつた様子はない。なお、『伝記の友』はそもそもサファヴィー朝に先行する中央アジアの王朝ティムール朝下で書かれた年代記であるが、同書に記録されているティムール朝およびアク・コユンル朝の支配者の即位の記述も類型的かつ簡素なものであり、拠点となる都市を占領したこと、その名前でフトバが唱えられ、イスラームの慣行に則って、正当な支配者として承認されたことが確認されるのみである。⁽⁹⁾

タフマースプ1世時代に執筆された諸年代記にしても、アッバース1世時代の代表的な年代記『アッバース大帝記』*Tarīḥ-i 'ālam-āra-yi 'Abbāsī*にしても概ねイスマール1世の即位の記述は簡素で、彼がタブリーズに入城し、十二イマーム派のイマームの名前でフトバが行われたことを伝えるのみである。タフマースプ1世時代に執筆が始められ、アッバース1世に完成した『歴史の精髓』*Hulāṣat al-tawārīḥ* は唯一、シャーのタブリーズ入城の前に同市の貴顕たちが彼を出迎えたことを詳しく伝えている。

「イスマールが」その華麗なる都に近づくと、サイイド、カーディー、有力者、貴顕たちは、喜びをもたらす接近について知らされ、出迎えに急ぎ、世界征服者への足下の接吻の榮譽を得た。彼らは崇拜と恭順の儀式を遵守し、幸運なる星の合一の御方は各人に限りなき恩恵と善意を授けた。彼は統治の都 (*dar al-salana*)、統治の御座所 (*magari-sarī-salana*)、カリフの指導の中心地であるタブリーズに居を定め、公正と寛大の影を各地の住民に落とし、貧者や服従した者たちを専制の手から解放した。金曜日には各都市のハティープに十二イマームの名でフトバを唱えさせた。 (*Hulāṣat*, I, p.73)

(2) 第2代タフマースプ1世

イスマール1世は一五二四年に冬営地ナフチヴァーンにおいて三六歳の若さで急逝した。後を継いだのは長男タフマースプであった。遊牧系の王朝においては、王家の成員が等しく後継の権利を有するという思想から、しばしば王位継承争いが起こりがちであるが、イスマール1世が明確な遺言を残したため、タフマースプへの権力委譲は比較的円滑に行われたようである。⁽¹⁰⁾ とはいえ、新王のお披露目はイスマール1世が亡くなった同日の午前中に、その後ろ盾となる人物たちにより慌ただしく挙行された。⁽¹¹⁾ このことは、タフマースプ1世の即位が首都タブリーズで行われたのではなく、ナフチヴァーンで行われたという事実からも明らかであろう。⁽¹²⁾ タフマースプ1世時代に書かれた年代記の記述から、その過程を追ってみよう。

「有力者キョプク・スルタン・ウスタージャールと傳育人デイヴ・スルタン・ルームルー、ワジールのカーディー・ジャハーン・ハサニ、母后タージルー・ベグムらの合意により、」太陽のごときシャーの手を取り、ハーレムから連れ出し、幸運なる星の合一の御方の座、パーディシャーの王座に就けた。 (*Hulāṣat*, I, p.155)

申年（九三〇／一五二四年）ラジャブ月一九日（五月二三日）、月曜日の朝食時に、アレクサンダーのような皇帝の代理人、神の影たる信仰の守り手の御方は、支配の玉座に就かれた。その時、齢は一〇歳六ヶ月一二日であった。（*Alsom*, p.241）

王の宝冠がその高貴な存在によって飾られると、アミールたちや王宮（*bargah*）の側近たちは、国家の重臣たちや軍の貴顕たちとともに御方の即位の祝賀のために統治の王座のもとに参じ、彼らの間で伝統となっていた習慣に従って全員が跪拝（*sujūd*）し、祈祷（*du‘ā wa tana‘a*）を行った。（*Īl‘ī*, p.84）

後に首都をカズウィーンに移し、王権の安定化に成功したシャーも当時はまだわずか一〇歳で、その即位に際して自ら王権の威光を高めるような演出を施すだけの余力も余裕もなかった。一方で、彼の後ろ盾となる傳育人（後見人）や母后たちの主導で行われた即位儀礼で着目されるのは、シャーが同時にサファヴィー教団教主としての性格を有し、王朝の統治組織の有力者が教団組織の有力者と重なっており、『イルチ史』が描くように、その習慣に従ったと思われる跪拝と祈祷が行われている。サファヴィー朝年代記も含めたペルシア語年代記において、支配者への恭順を示す行為として頻繁に使われる表現である「足下への接吻（*pa‘-bus*）」は、ここでは使われていない。

サファヴィー朝初期の二人のシャーの時代は、それぞれ状況は異なるものの、王権はいまだ不安定なものであり、世俗王権の威光を示すような即位儀礼の発展はここではまだ認められない。

第二章 サファヴィー朝中期 即位式の舞台化の始まり

(1) 第3代イスマーイール2世

タフマースプ1世が九八四年サファル月十五日／一五七六年五月一日未明に五二年にわたる統治の末に亡くなった時、カズウィーンを首都とするサファヴィー朝の支配体制は安定したものとなっていた。しかし彼の死は同朝に再び混乱を巻き起こした。タフマースプ1世の長男スルタン・ムハンマド・フダーバンダ・ミールザーは目に障害を抱え、周囲からは統治には不適格とみなされていたし、王の死亡時には首都とは遠く離れた南部シーラーズに滞在していた。次男イスマーイール・ミールザーは若い頃から軍の指揮官としての勇敢さで知られたが、それゆえに父からは危険な存在とみなされ、二〇年以上も投獄状態に置かれていた。決定的な後継者がいない状態でシャーが没したことは、グルジア系の母を持ち、当時首都にいて父の死を見取り、後継の最有力候補であったハイダル・ミールザーを王位に就けようとする勢力と、マウシルルー部族出身の母を持つイスマーイール・ミールザーを支持する勢力との間に緊張状態をもたらした。結局、タフマースプ1世の娘で父の助言者として政策にも影響力を持っていたバリー・ハーン・ハヌム王女が、イスマーイール・ミールザー支持にまわったことにより彼の王位継承が決まった。しかし、この間のキジルバシュを中心とした旧勢力とタフマースプ1世により登用された新興勢力があい乱れての駆け引きの末、翌日の夜にハイダル・ミールザーがイスマーイール・ミールザーを支持する勢力に殺害されたことは、キジルバシュ勢力の専横を招き、アッバース1世が即位するまでの政治的な混乱のきつかけとなった。⁽¹³⁾

一年半の短い統治の末に謎の死を遂げたイスマーイール2世は、自らの支配を脅かす恐れのある王子たちを次々に

殺害し、その残虐さで知られているが、すでに即位の際に、自らの王権を確固たるものにすべく周到な準備を行なっている。幽閉されていたカフカハ Qahqaha の牢獄から開放され、首都カズウィーンに向かったイスマーイール2世は、彼はまずアルダビールにある一族の廟を参詣し、ザンジャーインで王族関係者や宮廷有力者らによる盛大な出迎えを受け、父王の死から約一月後のラビーイ月一七日／六月一三日にカズウィーンの市外に到着したが、天文学者たちが算出した入城に佳いとされる日時まで、市内には入らなかった。⁽¹⁴⁾ 市内入城後も新たなシャーは自らの支持勢力のなかで中心的な役割を果たしたフサインクリー・フラハー・ルームルー Husain-Quli Flulah Rūmlū の邸宅に一五日間滞在し、すぐにはダウラト・ハーナには入らなかった。⁽¹⁵⁾ そして、『アッバース大帝記』によれば、フサインクリー・フラハー・ルームルーの権勢が目にと余ると見るとこれを追放し、また女性でありながら政治に口出しするバリー・ハーシ・ハヌム王女を冷遇した (TAA, I, pp.199-202)⁽¹⁶⁾。

自らの解放と即位に功のあった人間を排除する一方で、イスマーイール2世はアミールなどの要職の任命を行っている。自ら選んだ日時に王宮に入った後は、自ら定めた即位の日まで儀式に備えて王宮地区の建物の改装・新築を行なった。即位の日が近づくと、それまで王宮に安置されていたタフマースプ1世の遺体をマシユハドに埋葬するまでの間イマーム・フサイン廟に仮安置するため、その移送の儀式を盛大に執り行った。新たなシャーは王宮からの棺を運び出す際には他の王子らとともに運び手の一人となり、王宮を出てからは馬に乗って棺の移送を先導し、シャーの交代と自らの後継者としての即位の正当性を周囲に知らしめた (TAA, I, p.206)。九八四年ジュマーダーI月二七日／一五七六年八月二二日にチュヘル・ソトゥーン宮殿で行なわれた即位式の様子を『歴史の精髓』は以下のように記録している。

熟練した天文学者たち、真実を語る星見たちは、前述の年（九八四年／一五七六年）ジュマーダーI月二七日の

水曜日を吉兆の御方の幸運なる支配の王座への即位のために選定していたが、その数日前、スルタン・イブラーヒム・ミールザーに、この盛大な祝典のための武具を取り出し、その大きな集まりの挙行の責務が下された。

その日、統治の都 (*dar al-saltana*) にいた王子たち―スルタン・イブラーヒム・ミールザー、スルタン・スライマン・ミールザー、スルタン・ムスタフィー・ミールザー、スルタン・マフムード・ミールザー、スルタン・アフマド・ミールザー―、大アミールたち、その他の側近たち、政府の高官たち、サイイドたち、カーディーたち、貴顕たち、国のアーヤーンたちは相応しい身なりをしてダウラト・ハーナに参内した。カプチたち、ヤサーウルたち、イシクアガシバシたちはそれぞれの持ち場に就き、その日、従者たちやアミールたちは宮殿前の広場に立って主を待ち受けた。ハーンたちの太鼓がダウラト・ハーナに運び込まれ、打ち鳴らされた。天文学者たちは難解な時、天文学の真理の研究の後に時を選んだ。……偉大なるウラマーたち、気高きシャイフたちが参内し、アリー・アラブと礼拝の導師ミール・ラフマト・アッラーが届けられた御方の敷物をチェヘル・ソトゥーン宮殿に持ち込み、天国に住むシャーの座に敷き、いと高き御方はそこに座られた。ハーフィズたちは、クルアーン朗唱に勤しんだ。 (*Hulāṣat*, II, p.626)

この後の記述は、即位式に列席した王子たち、アミールたちが新シャーに恭順の意を示すためにシャーの足下へ接吻する様子が描かれる。この記述からわかるのは、即位の日時が天文学者によって算出されていること、イスマール2世の主導によって盛大な即位式の開催が準備されたこと、サファヴィー朝の支配者層や宮廷人たちが序列に従って各々の持ち場に就いて新たなシャーの宮殿への登場を待ち受けたこと、その即位がクルアーン朗唱によって承認されていること、そして全ての儀礼の舞台としてチェヘル・ソトゥーン宮殿が機能していることである。即位式に関

する記述は『歴史の精髓』と『アッバース大帝記』では大差はないが、参加した支配者層の序列は両年代記では異なっており、後者では軍人や官僚たちが宗教層よりも先に列挙されている。⁽¹⁷⁾ いずれにせよ、その参列者は、王族、軍力の中核を形成し、かつ教団の構成員でもあるキジルバシュの大アミールたち、宗教指導者層であるウラマーたち（『アッバース大帝記』ではカーデーイの代わりにムジュタヒド）、官僚たち、そしてサファヴィー朝時代にさらなる優遇が進んだサイドたちなど、王朝を支える新旧支配者層や国内外の支配者たちから成り、イスマール2世の即位の正当性を確認する証人として、壮麗なる即位式に臨席しているのである。

新たに即位したシャーが座した「御方の敷物 (*dūṣāk wa qāf-čā-i humāyūn*)」は、一種の玉座の役目を果たしている。御方はイスマール2世自身を示しているのであるが、その前任であるタフマースプ1世もしくは祖父イスマール1世の王権を継いだことの象徴としてそのいずれか敷物が持ち出されているのかまでは判断不能である。武器 (*yarāq*) の詳細も不明だが、『アッバース大帝記』は、タフマースプ1世の臨終時にダウラト・ハーナにいたハイダル・ミールザーが父の王冠 (*taji-šān*) を被り、その剣 (*samsir*) を帯びて、彼を後継者に指名する遺言状を公にしたことを記述している (TAA, I, pp.192-193)。遺言状の真贋はともかく、ここで王権の象徴として王冠、剣、敷物 (玉座) が持ち出されていることは興味深い。なぜなら、これらの品々はサファヴィー朝後期の即位式の際の重要な聖器となるからである。

(2) 第4代スルタン・ムハンマド・フダーバンダ

即位から一年半後にイスマール2世が首都カズウィーンで謎の急死を遂げた時、王位継承が可能な王子は、その兄で眼病を患うスルタン・ムハンマド・フダーバンダ・ミールザーとその息子たちしか残っていなかった。当時、

彼はシーラーズにおり、すぐさま急使が送られて新王とその家族はカズウィーンに呼び戻されることになった。彼の即位については、いずれの年代記も簡単な記述しか行っていない。『アッバース大帝記』の著者イスカンドル・ベク・ムンシーは、カズウィーンにおいてシャーの到着を目撃しているが（九八五年ズー・アルヒτζジャ月三日／一五七八年二月一日）、天文学者の算出した日に、スルタン・ムハンマド・フダーバンダが市民の歓迎を受けてカズウィーン市内、更にはダウラト・ハーナに入り、タフマースプ一世の妻や娘たちの足下の接吻を受けたことを伝えるのである（*TAA*, I, pp.225-226）。『歴史の精髓』（ちなみにスルタン・ムハンマド・フダーバンダのカズウィーン市内入城はズー・アルヒτζジャ月五日／一五七八年二月一日）は、彼の即位を以下のように伝えている。

真実を語る天文学者たち、熟練した星見たちは、統治の玉座への賛美すべき着座のための幸運なる時の選定を行い、ジャームのごときシャーは、その年（九八五／一五七八年）のズー・アルヒτζジャ月の木曜日に壮大、壮麗かつ完璧にダウラト・ハーナにお入りになり、支配の玉座、敬うべき父の座に着座した。（*Hulāsat*, II, p.661）即位の日時が天文学者によって算出されていたこと、即位式がダウラト・ハーナにおいて壮大かつ壮麗に行なわれたことは記述されているものの、その詳細については明らかにならない。

スルタン・ムハンマド・フダーバンダは目の病のこともあって政治への関心は薄く、タジク出身の王妃やその王子ハムザ・ミールザーが実権を握った。このことはキジルバシユたちの不満を招き、両者が殺害される結果となった。その後のスルタン・ムハンマド・フダーバンダはキジルバシユの傀儡にすぎず、キジルバシユ有力者間の権力争いが激化し、最終的に別の息子アッバース・ミールザーにより廃位されてしまう。

(3) 第5代アッバース1世

スルタン・ムハンマド・フダーバンダの三男アッバース・ミールザー、後のアッバース1世は即位前にはホラーサーン地方に派遣されていた。彼は首都を中心としたイラクのアミールらと対立するホラーサーン地方のアミールらによって、一旦同地方の支配者に擁立されるが、これについては「(ホラーサーンのアミールたちが)王子アッバース・ミールザーをその地の統治の玉座に就けた」(*Hukūyat*, II, p.712)と記録されるのみである。当時一七歳であった彼の正式な即位にしても、ホラーサーンの有力アミールで彼の後见人であったムルシドクリー・ハーン・ウスタージャーラーの意向が大きく、また父王の廃位という特殊事情もあり、年代記の記述には差異がみられるし、最盛期を創出した王のものとしては淡々とした描写といえる。『歴史の精髓』の記述はスルタン・ムハンマド・フダーバンダの即位の記述と同様に定型の域を出ていない。

勝利の旗が統治の館カズウィーンに近づく、トルコ人もタジク人も貴人も卑賤の者も、その天国の地の住民は出迎えに馳せ参じ、市内とバーザールをさまざまな手法で飾り付けた。熟練した天文学者と真実を語る星見たちが時間を算出し、先述の年(九九五年)ズー・アルカアダ月一日／一五八七年一〇月一六日、日曜日に軍隊の星であるアレクサンドロス大王のごときシャーはダウラト・ハーナに入り、チェヘル・ソトゥーン宮殿において天国に住む祖父の統治の座に着座した。(*Hukūyat*, II, pp.861-862)

これに対して、『アッバース大帝記』はスルタン・ムハンマド・フダーバンダの廃位の状況を明らかにしている。アッバース・ミールザーがホラーサーンからカズウィーンに進軍する間に、ムルシドクリー・ハーン・ウスタージャーラーはイラクのアミールらとの間で王の交代について交渉を重ねた。最終的にスルタン・ムハンマド・フダーバンダが自らの退位を認めると、当時カズウィーン郊外に天幕を張っていた宮廷から多くの宮廷人が離反し、王子に謁見す

べく市内へと急いだ。やはり宮廷から離反していた楽隊はアッバース・ミールザーがカズウイーンに到着すると、トランペットの演奏でこれを迎えた。アッバース・ミールザーはその日のうちにダウラト・ハーナに入り、翌朝、ムルシドクリー・ハーンのワジールがスルタン・ムハンマド・フダーバンダと同伴していたアブー・タールィブ・ミールザーを天幕から市内に案内した。アッバース・ミールザーはシャーと弟王子をダウラト・ハーナに出迎えた。

貴き繁栄の御方は尊敬すべき父君を出迎え、謁見に際して父の手への接吻の榮譽を得、親愛なる弟を心から抱擁し、高名なる父の手を取ってハーレム地区に案内した。アレクサンドロスのごとき御方は、日々の不愉快な状況に世の争いごとに心を痛め、健康と平穩のみを望んだ。息子アッバースとの邂逅を心からお喜びになり、自ら統治と王権 (*salanat wa pādshāh*) から退き、いと高き御方の頭を王冠 (*tāj wa hāj-i sāh*) で飾り、父祖からその御方まで伝えられた精神の導き (*wadāy-i iṣādt*) を気高き子息に委ねられた。それまでイラクの軍隊においては貴顕から下層の者たちまでアッバース・ミールザーとして知られていた祝福された御方の名は、シャー・アッバースとなった。(TAA, I, pp.372-373)

即位の翌日に、アッバース一世はチェヘル・ソトウーン宮殿にアミールや政府高官を招集し、スルタン・ムハンマド・フダーバンダがあらためてアッバースが世俗の統治と精神的な後継を統合 (*yāmī-i salanati-šūr wa hijāfat-i na-ḥawī*) したことを認めた。王座の前に並んだキジルバシユのアミールたちやアーヤーンたちは、シャー・アッバースへの忠誠を誓った。『アッバース大帝記』には、この間の詳しい日付が記載されていない。しかし、ふたつの年代記の記述を合わせると、アッバース一世が恐らく算出された日時に市内のダウラト・ハーナに入ったその日にハーレムの閉鎖空間での禪譲が行われ、その翌日(ズー・アルヒジジャ月一五日／一〇月一七日?)のうちに、チェヘル・ソトウーン宮殿において正式な即位式が行なわれたと考えるのが妥当であろう。また、『アッバース大帝記』の記述

は、王冠が王権の象徴であること、サファヴィー教団の教主としてのシャーの役割が維持されていることを明らかにする。アッバース・ミールザーとシャーの間の交渉にはカズウィーンのみジュタヒドが仲介に入っており、イスラーム的な即位儀礼の要素は確認はできないものの、禪譲がイスラーム法の専門家の立ち合いのもとで行なわれていたことは間違いないだろう。

イスマール2世からアッバース1世の時代は、タフマースプ1世が整備した首都カズウィーンが王朝の政治の中心地として機能していた。そのなかで即位式は、王権の誇示を目的として、宮殿を舞台とする見せるための演出が發展していったといえるが、特に王冠などに象徴される世俗的な要素が取り入れられていったことが特筆されよう。

第三章 サファヴィー朝後期の即位式

(1) 第6代サファイー1世

アッバース1世は約四二年にわたる統治の間にサファヴィー朝領内に平和と繁栄をもたらした。彼は首都をカズウィーンからイスファハーンに移したが、実際には晩年は夏をイスファハーン、冬をカスピ海南岸のマーズンダラーン地方で過ごすことを習慣としており、亡くなったのもマーズンダラーンであった。彼は同地方に出生する前に滞在していたカズウィーンで重体となり、すでに亡くなっている長男の息子で当時一八歳のサーム・ミールザーを後継者として指名していた。このため第6代シャー・サファイー1世の即位は、サファヴィー朝のシャーの交代としては、比較的平和裏に進められたものとなった。

アッバース1世が亡くなると、同行していたアミールたちは首都イスファハーンに急使を派遣する一方、シャーの

遺体を同市に向かつて移送させた。イスファハーンのアミールたちは反乱の発生を恐れ、アッバース1世の遺体の到着を待たず、当時はイスファハーンのハーレムにいた新シャーの即位の決行することにした。サフイー1世時代の年代記は次のように伝えている。

一〇三八年ジュマードⅡ月四日／一六二九年一月二九日、月曜日の夜、(イスファハーンの高官たちは)ムジュタヒドのサイイド・フサイン・ジャバル・アルアミリー Sayyid Husain Jabal al-'Amir の息子ミールザー・ハビーブ・アッラー Mirzā Habib Allāh やミールザー・アブド・アッラー・シユースターリー Mullā 'Abd Allāh Sūstār の息子ムッラー・ハサン・アリー Mullā Hasan 'Alī やハキーム・カーシユファー・ヤズデー Hakīm Kašfā Yazdī の息子ミールザー・ガージー Mirzā Gāzī などのウラマーたちや学識者たちと協議した。その幸運なる時に、彼らは天国に住む幸運なる星の合一の御方、シャー・イスマエールの腰帶と剣とを御方の身につけ、アリ・カプ宮殿で玉座と冠をその素晴らしきお姿で飾った。そしていと高き祖父に代わってパーディシャーの座に就けた。この偉大なる祝典の祝いのため、太鼓とトランペットの音を七つの地の住民の耳に届け、あらたに勝利と統治の旗を立てた。その当時、統治者の不死鳥の翼の影にいた者たちは、足下の接吻の榮譽を得た。夜のうちに、この幸運な御方の名としてシャー・サフイーが定められ、その名で知られるようになった。(Hulāsat al-siyar, pp.37-38)

翌日には民衆 ('amma) たちが王宮 (daulat-sarā-yi šāhī) に殺到し、かつてシャー・イスマエール1世によってシリアから招聘された十二イマーム派の学者アリー・カラキの子孫ミール・ダーマード Sayyid Muhammad Bāqir Damād が礼拝を行った後に、前の晩に挙行された即位式が同じ建物で繰り返され、昨晩は同席できなかった統治に関わる様々な階級の者たち、イスファハーン住民が足下の接吻の榮譽に浴した。

サファイー1世の即位式についての記述からは、伝統的なイスラーム的な要素と神秘主義教団的な要素の保持が明らかとされる。夜中の即位式と翌日の即位式ではそれぞれ高名な十二イマーム派のムジュタヒトが列席し、新王の即位をイスラーム法の立場から正当化している。⁽¹⁸⁾ 一方で、『アッバース大帝記補遺』は、アッバース1世の遺言に従い、サファイー1世の即位式の準備にあたった者たちのなかにスーフイーらの名前も挙げ、それがスーフイーの規則に則って行われたことを言及している (ZJTA, pp.6-7)。Newman によれば、アッバース1世の治世を支えた新旧勢力は新支配者の支持者として即位式の挙行に関わり、サファイー1世時代は依然としてスーフイーの原理とシーア派の原理がサファヴィー朝の国家体制を支えていた。⁽¹⁹⁾ もっとも、スーフイー的な儀礼の要素は、年代記の即位式の記述からは確認されないことには留意すべきである。

一方、イスマール2世時代に導入された世俗王権の要素についていえば、サファイー1世の即位式では更に凝った演出が施されていることがわかる。新王は王朝の創始者シャー・イスマール1世の腰帶と短剣を帯びてアリ・カプ宮殿に登場する。腰帶と短剣は王権移譲の象徴である。そして、戴冠して王座に着座する際には、夜中にもかかわらず楽の音によってこれが周知される。また二連の行事は翌日には繰り返され、不在だった政府関係者のみならず、一般民衆にも王権の威光を示すべく公開された。

アッバース1世の統治は四二年の長きにわたったため、即位儀礼に限っていえば、それ以前の即位儀礼がサファイー1世の即位儀礼にどのような影響を及ぼし、どのような発展の過程を経たのか検証するのは難しい。即位式の手順が事前にどの程度準備されていたのかもわからない。あるいは、アッバース1世の謁見儀礼など、他の宮廷儀礼が参考にされていたのかもしれない。いずれにしても、アッバース1世の平和な繁栄の時代が、見せることを念頭に巧妙に演出された即位式を可能にしたことは確かであろう。

(2) 第7代アッバース2世

サフイー1世はカンダハールへの遠征に向かう途中にカーシャーンで急死した（一〇五二年サファル月一二日／一六四二年五月一二日）。一四年に満たないサフイー1世の統治の後半においてその政務を司っていたのは大宰相のサル・タキーで、サフイー1世の崩御の四日後の一〇五二年サファル月一六日／一六四二年五月一六日にカーシャーンで挙行されたアッバース2世の即位式も、サル・タキーが取り仕切った（cf. Newman, p.81）。サフイー1世は遺言を残していなかったため、まだ九歳八ヶ月の少年であったその息子の、首都でない地方都市での慌ただしい即位には、王位継承をめぐる反乱の発生を未然に防ぐ意図があったのであろう。⁽²⁰⁾ アッバース2世時代の代表的年代記である『至高の天国』*Ĥuld-i barān* (*Ĥuld*, pp.369-371)、『アッバースの書』*‘Abbās-nāma* (*Tārīḫ-i jahān-ārā-yi ‘Abbāsī*) (AN, pp.338-342) と『皇帝の物語』*Qisās al-ḥāqān* (*Qisās*, pp.266-270) は、この時代の年代記の特徴として華美で比喩を凝らした表現に満ちていて、実際に何が行われたのか解明に困難な部分もあるが、表現の差こそあれ即位式についての具体的な情報には大きな相違はなく、アッバース2世の即位儀礼はサフイー1世の即位儀礼を踏襲したものとなっていることが明白である。

王朝の創始者イスマーイール1世の剣 (*tiğ*) を帯びた新王は、天文学者 *Maulānā Muḥammad Šaḥ*、*Munajjim Ḥurāsānī* が算出した夜中 (*šab*) に、アミールたち、ワジールたち、政府高官たち、貴顕たちの列席のもとに統治の座に着き、アッバース2世の名前が定められた。そして翌日、あらためて公へのお披露目としての即位式が行われ、「その喜ばしい天命の夜に御方の即位のフトバは天上人の耳に届けられ、地上人もまた、人が住む地域の統治の委託の雄弁なるフトバをその勝利の日に耳にし」(*Ĥuld*, p.371) たことにより、アッバース2世の即位の正当性が法的に承認された。そして、有力者、アーヤーンや使者たちのみならず、富裕層から一般民衆まで (*az mardumān-i ḥwāssa wa*

‘awām)、カーシャーンの幅広い階層の人間が足下への接吻の荣誉に浴した。また、アッバース2世の名で貨幣が铸造された (*Qisq*, p.270)。

夜中の即位式がどこで挙行されたのかは書かれていないが、翌日の即位式は「支配の吉兆の新年の日(ノウルーズ)に、信徒の館カーシャーンのダウラト・ハーナの建物の上のホール (*‘iwām*) を日の出の場と定め、あらためて世界保護の玉座に座り、期待に待つ者たちを迎えられた」(*Hud.* 370) とあるのに、やはり同じくダウラト・ハーナで行われたのであろう。⁽²¹⁾

(3) 第8代サファイー2世

続くサファイー2世は一年半後にはスライマン1世として即位し、生涯に二度の即位式を行ったシャーである。彼の時代には同時代年代記が残されていないが、その当時イスファハーンに滞在していたフランス人宝石商のシャルダンがその即位の様子を詳細に描き残している。

アッバース2世は一〇七七年ラビーⅡ月二六日／一六六六年九月二五日に、カスピ海南岸地方から南の山岳地帯にある滞在先のダムガンで亡くなった。遺言はなかった(シャルダンの提示するヒジュラ暦と西暦は一致しない)。

ヒジュラ暦が正しければ西暦は十月二六日、西暦が正しければヒジュラ暦はラビーⅠ月二五日)。二〇歳になる長男サファイー・ミールザーは父王によってイスファハーンで幽閉状態にあり、八歳になる次男ハムザ・ミールザーは母とともに父王と同行していた。政府高官たちの議論の結果、長子サファイー・ミールザーが新シャーに選出され、即位式の日時を算出する天文学者二名、儀礼に用いる宝石類の移送と保全の責任者四名、儀礼においてシャーの足下にひれ伏すべき五名の大官(首相、総監、奴隸たちの將軍、法務長官、第一國務長官)の名代五名を含む特使がイスファハ

ーンに派遣された（シャルダン、一三―五四ページ）。

七日後のジュマードーI月三日／十一月一日（西暦に従えば、ラビーII月二日／一〇月二日）にイスファハーンに特使が到着すると、その夜のうちに新王の即位式が挙行された。シャルダンの詳細な描写から主要な儀礼を順に従って書き出してみる（シャルダン、七一―九〇ページ）。

(1) 即位儀礼

- ・天文学者たちが告げた戴冠に佳き時間（午後一〇時すぎ）に儀式開始、夜中一二時近くに終了
- ・王宮地区にあるターラール・イ・タウイーラ（厩舎のホール）での挙行²²
- ・ターラールの中央に四つの聖器（黄金の玉座、冠（タージュ）、剣（シャムシール）、短剣（ハンジャール）を安置

・高官やその名代たちはシャーの左右の決められた席次に従い着座、政府高官の全員一致で新シャーが選出された旨が書かれた書簡が將軍により読み上げられる

・新王の名前の選定（サファイ・ミールザーは自分の名前の継続使用を望む）

・シャイフ・アルイスラームが書簡を確認

・シャーはメッカ方向に顔を向けて玉座に着座、シャイフ・アルイスラームによる神への祈願の後に、シャーの左脇に剣、右脇に短剣が帯かされ、最後に戴冠

・博学の士による四段構成の祈祷演説（神の賛歌、預言者とイマームへの賞賛・感謝、王権が神の命令によるものであること、新王のための祈り）

(2) 即位式終了後の行事

- ・カイサーリーエの上階で楽器の演奏（以後、二〇日続く⁽²³⁾）
- ・新王の名前での印璽・貨幣鑄造（翌日の祝儀のために直ちに貨幣鑄造を遂行）
- ・翌朝の午前九時から一〇時まで、シャーは再びターラル・イ・タウイーラに着座、拝謁の榮に浴しうる身分の者たちが足下に接吻
- ・儀式の後、新シャーは王宮周辺を約一時間かけて騎馬でまわり、市民にお披露目

サファイー2世の即位後に国内状況の不安定が続いたことやシャーの健康状態が損なわれたことから、即位の時に幸運の星位をとる時間が選ばなかったことが原因であるという意見が出て、一年半後（一六六八年三月二〇日）に宮廷は新たに佳き日時を選定して、シャーを新たな名スライマンで即位させることを決定した。即位式はチェヘル・ソトゥーン宮殿に変更されたが、初回とはほぼ同じ手順で進められたという（シャルダン、二三八―二四〇ページ）。

サファイー2世の即位式の間となった宮殿や彼が身に纏った王権の象徴となる品々にはヴァリエーションが生じているし、儀礼の手順についてはペルシア語の年代記には記録されていない細部にわたる描写がなされているが、儀礼の基本的な枠組みや手順はサファイー1世時代のものが踏襲されていることはあきらかである。サファヴィー朝後期の即位式の特徴として挙げられるのは、第一に夜中に列席者が限られた状況で即位式が挙行され、翌日にあらためてお披露目のために儀礼が繰り返されたことである。これはイスマーイール2世時代から始まった「見せる王権」（羽田（2000））としての即位式が、サファヴィー朝後期に独自に発展したものである（内輪と公での二度の即位は、アッバース1世に前例を見い出すこともできよう）。ただし、サファイー2世のスライマンとしての二度目の即位式は朝九時

が佳き時として選ばれているので、あくまでの天文学による佳き時 (*ḡalṭi ḡaḡ*) の選出が優先された結果で、夜中の即位儀礼に何らかの秘儀的な意味づけを見いだすのは困難なようである。サファヴィー朝では天文学による星見が政策決定を左右し、天文学者 (占星術師) が大きな権力を持っていたことが知られている (cf. シャルダン、三三ページ)。実際、すでにイスマーイール一世時代のタブリーズ入城の際に日時の選定が行われ、サファヴィー朝では初期から即位にあたっての天文学の関与が確認されるが、サファヴィー朝後期はその傾向が更に強まったといえよう。なお、スルタン・フサイン時代に書かれた行政の手引書には高官の序次が明らかにされているが (cf. Lambton (1991), p.525) 、この慣行は遅くともサフイー2世時代までには確定していたようである。

第二に、第一章で挙げた即位儀礼に観察される三つの諸要素のうち、非イスラーム的な世俗王権の要素が増加するのに反比例して、イスラーム神秘主義的な要素が弱まっていくことである。サフイー2世の即位式の最後に行われる祈禱演説では、第三段でシャーが「神の影」であること、第四段で「聖なるイマームの血をひく尊い子孫」であるシャーが「真の法によりてこの世に在り、彼は全世界の主の代理人にしてこの世の正統の君主」であることが説かれ、シーア派の立場からシャーの正当性が法的にも承認されるが、少なくともサファヴィー教団教主としての立場を確認するような儀礼をシャルダンは記録していない。

スライマンは一一〇五年ズー・アルヒッジヤ月五日／一六九四年七月二八日にイスファハーンで崩御した。残された二人の息子のうち後継者に選ばれた二六歳の長男スルタン・フサインは、同月一四日／八月六日に同市で即位したが (*Fawā'id al-ṣafawīya*, p.78; *Maqāyīd al-simn*, p.549) 、実質的にサファヴィー朝最後のシャーとなったスルタン・フサインには同時代年代記が残されておらず、即位式の詳細は不明である。

おわりに

サファヴィー朝の即位式は、初期はシーア派王朝の支配者としての正当性とサファヴィー教団教主の地位継承を承認する目的で行われたが、タフマースプ1世時代に首都に王宮が建設され、首都を拠点としてサファヴィー朝の王権強化がはかられたのに従い、徐々に世俗的な要素が取り入れられていった。特に後継者をめぐる内乱の末に即位したイスマーイール2世は、自ら盛大な即位式を演出し、それが後の即位式の発展につながっていった。

サファヴィー朝では嫡男継承の傾向はあったものの、王位継承のルールは定められておらず、シャーの交替時は常に内乱の危険性が高まった。タフマースプ1世、サフイー1世、アッバース2世、サフイー2世、スルタン・フサインは父（または祖父）から嫡男にシャーの位が譲られているが、後継のシャーはしばしば幼少であり、遺言がある場合も、そうでない場合も、即位式はキジルバシュの有力者やワジールなどの政府高官の主導で挙行された。即位式はシャーの王権を周囲に誇示する役割を持ち、原則的に首都の王宮で挙行されるべきものであったが、タフマースプ1世やアッバース2世の即位の時のように、先王の急死で内乱が恐れられた場合には、その地で即座に即位式が実行されたのであろう。⁽²⁴⁾

イスマーイール2世は幽閉の身から解放され新シャーに選出されると、先祖が埋葬されたアルダビールに参詣した後、佳き時を選んで首都カズウィーンに入城した。他に適任者がおらず王位継承が決まったスルタン・ムハンマド・フダーバンダも、赴任地のシーラーズから呼び戻されてカズウィーンで即位している。すでにホラーサーン地方の有力アミールらによってその地の支配位に就けられていたアッバース1世にしても、父王を廃位してシャーとして即

位するにあたってはカズウィーンに上洛し、正当な王権交替を周囲に印象づける様々な仕掛けが施された。サファヴィー朝では、一方で移動の習慣を保持しながらも、首都を中心に定住を基盤とする中央集権的な統治体制を整えていった。首都でシャーの交替を公に知らしめる即位式は、それを象徴する儀礼のひとつであったといえよう。

注 (1) 例えば、カズウィーンについては、Szuppe (1996) 'Echnaqi (1996)、後藤 (2004) (2005)、イスファハーンについては、羽田 (1987) (1992) (1996) (2000) ' Babaie (2008) など。マーザンダラーンのアシュラフとファアフアーバードについては、それぞれ Porter (1996) ' Kleiss (1982) がある。

(2) Melville (1993) はアッバース1世の統治を三期に分け、時代ごとの移動の特徴を論じている。すなわち、(1) 即位からイスファハーン遷都およびヘラート征服 (一五九九年) が行われるまでの、征服活動が活発で各地を頻繁に移動した時期、(2) ファアフアーバード建設 (二六二二年) までのイスファハーンを中心とした移動が行われる時代、(3) アシュラフ建設 (一六二二年) からシャー・アッバースが死去するまでのイスファハーンと冬営地マーザンダラーンとの間の移動が繰り返される時代である。なお、第三期の夏営と冬営の詳細な移動については、後藤 (2004) の表を参照。

(3) これについては、Melville (1993) がすでに指摘し、また平野 (2000) もこれを踏まえて、シャー・タフマースプ1世時代の地方都市コムとイスファハーンのハーレムの移送先としての役割を論じている。また、平野は都市定住嗜好が強く、従来の枠組みから逸脱したシャーとして、シャー・タフマースプの晩年の二〇年間と続くシャー・イスマーイル2世の一年半の首都カズウィーンでの統治時代を挙げている (平野 (2000), pp.2, 12-13)。筆者は現在、イスラーム地域研究京都拠点 (KIAS) 文科省公募研究「イスラーム法とテクノロジー」の一環で、サファヴィー朝のシャーの移動について研究を進めている。また、平成二二年度九州史学会大会イスラーム文明部会 (二〇〇九年一月二三日開催) で「サファヴィー朝後期の首都と儀礼」という発表を行い、サファヴィー朝後期のシャーの移動の概要を明らかにするとともに問題提起をしている。本稿はその発表の一部を基にしている。

(4) これについては、Babaie (2003), pp.37-44; Szuppe (1996), pp.161-162; 後藤 (2005), pp.101-102, など²⁾を参照。

- (5) 本稿の考察対象のサファヴィー朝と同時代の中央アジアのモンゴル系イスラーム王朝の儀礼については間野 (2004) を参照、オスマン帝国における王権儀礼に関しては、奥 (2009) がヨーロッパ宮廷における王権儀礼との関連性も含めて研究状況を紹介している。イランの儀礼全般の概観は Lambton (1991) を参照。
- (6) 第8代のシャー・スライマーンはまずサファイー2世として即位した一年半後にシャー・スライマーンとして即位し、二度の即位儀礼を経験しているため、計一〇回となる。
- (7) 一三世紀から一四世紀にかけてイランおよび中央アジアを支配したモンゴル系の諸ハーン国は、モンゴル独自の即位儀礼を有し、イスラーム化以後も長くその儀礼を保持していたことが知られている (間野 (2004))。一方で、その後継王朝にあたるティムール朝やカラ・コユンル朝、アク・コユンル朝がその儀礼を継承した様子は史料からは確認されない。
- (8) サファヴィー朝の年代記については、平野 (2006) および後藤 (2008) を参照。
- (9) ティムール朝シャー・ルフ (*Habib*, III, p.554)・同朝スルタン・フサイン (*Habib*, IV, p.146)・アク・コユンル朝ハリール (*Habib*, IV, p.430)・アク・コユンル朝アフマド (*Habib*, IV, p.442) など。アク・コユンル朝時代に書かれた年代記『アミーン史』*Tarīḥ-i amīnī* に記録されたスルタン・ヤークーブの即位も、彼が政敵を打ち破って「首都タブリーズ (*dar al-saltana*) で王座に就くた」(*Amīnī*, p.166) となしか伝えなく。
- (10) 平野 (2009)・pp.188-191を参照。
- (11) 年代記によって異なるが、イスマリーール1世の崩御は未明から朝にかけての出来事とされる (平野 (2009)・195)。タフマースプの弟たち三人のうち、幼い二名は彼と同様にハーレムに、後年タフマースプに処刑されるサーム・ミールザーは後見人とともにホラーサーンに赴任していた。
- (12) タフマースプの即位地については各年代記に記述はないが、ナフチヴァーンはタブリーズから北西に約一三〇km離れたところであり、状況からみてもナフチヴァーンで即位したと考えるのが妥当である。
- (13) 当時イスマリーール・ミールザー支持にまわった勢力はルームルー、アフシャール、カージャール、バヤート、ヴァルサク、クルド、パリー・ハーン・ハヌムとその叔父のシャムカール・スルタン (チエルクես人) など、ハイダル・ミールザーを支持した勢力はウスタージャルー、タリーシユ、タツカルー、グルジア人、シャイファールヴァンド、

- (14) クルチラ、およびタフマースブの甥のイブラーヒム・ミールザーであった (Newman, p.41)。
『歴史の精髓』によれば、市外到着はラビー1月二六日／六月二二日。また、ダウラト・ハーナに入るまでの間に、即位に関する協議が行なわれ、天文学者たちにより即位の日が算出された (*Hulāṣat*, I, pp.618-621)。
- (15) ダウラト・ハーナはタブリーズやカズウィーン、イスファハーンなど政治拠点となった都市にのみ確認される王宮地区で、各種の公共施設やシャーや高官の住居兼職場から成り、政治の中心としての役割を果たした (cf. Babāie (2008), pp.119-123)。
- (16) フサインクリー・フラハはサファヴィー教団の教主 (*muṣīd-i kāmīl*) の代理人ハリーフア (*ḥalīfa*) として教団員のスーフィーたちに大きな影響力を有していた。イスマール2世は彼の出身部族ルームルーのアミールたちに、教主のハリーフアに対する優越性をほめかし、その追放につなげた。この事件はサファヴィー朝体制内においてキジルバシュを核とする教団組織が根強く存続していたことを示唆している。
- (17) これに関して、また『アッバース大帝記』の当該部分の日本語訳は後藤 (2005) 、『pp.102-103』を参照。
- (18) ミールザー・アビーブ・アッラーもアリー・カラキーの親族の一人 (Newman, pp.201-2)。
- (19) Newman (2006), p.73 を参照。
- (20) ただし、カーシャーンは信徒の館 (*ḍār al-mu'minīn*) の別称を冠する都市で、コムやカンダハールなどと並び、統治の館 (*ḍār al-salṭana*) の別称を持つ首都級の都市 (イスファハーン、タブリーズ、カズウィーン、アシュラフとファルフアーバード) に次ぐ副都級の都市であった (平野 (2000) も参照のこと)。
- (21) カーシャーンのダウラト・ハーナについては詳細は不明。
- (22) ターラール・イ・タウイーラは王宮地区にあった現存しない、サファイー1世時代の年代記に初めて言及される宮廷行事用の建物で (cf. Babāie (2008), pp.157-166) 、サファイー1世時代とアッバース2世時代にはイスファハーンでノウルーズの祝祭が行われる際には、主にターラール・イ・タウイーラで挙行された。
- (23) カイサーリーエは王の広場に北側で面するバーザールの入り口にある建物。
- (24) タフマースブ1世とアッバース2世の場合、両者とも父の移動に同行し、その死に際してその場に居合わせたことも、首都以外の場所で即位式が行われた要因となっていたであろう。

- Abd al-Ḥusain al-Ḥusainī Ḥatunābādī, *Waḡy-i-i al-sim̄ wa al-a'wām : yā guzānīs-hā-yi sāliyāna az ibridā-yi ḡalāqat tā sāl-i 1195 hijrī*, M. Bihbadī, (ed.) Tehran, 1352.
- Abū al-Ḥasan Qazwīnī, *Fawā'id-i Šajfawīya : Tārḡ-i solāḡin wa umarā-yi Šajfawī pas az suqū-i dānlar-i Šajfawīya*, M. Mir Ahmadi (ed.), Tehran, 1990.
- Amīr Maḡmūd Ḥwāndamīr, *Tārḡ-i ḡalīb al-siyar fi alḡar afḡād al-bāsar*, 4 vols., J. Humā'ī (ed.), Tehran, 1333. (*Ḥabīb*)
- *Tārḡ-i Šāh Ismā'īl wa Šāh Tahmāsp Šajfawī (Zail-i ḡalīb al-siyar)*, M. 'A. Jarrāhī (ed.), Tehran, 1991.
- Būdāq Munšī Qazwīnī, *Jawāhir al-aḡbar : Baḡs-i tārḡ-i Īrān az Qarā Qūyunlū tā sāl-i 984 H. Q.*, M. Bahram-nizād (ed.), Tehran, 2000.
- Faḡl Allāh b. Rūzbihān Ḥunḡī Isfahānī, *Persia in A. D. 1478–1490. An Abridged Translation of Faḡlullāh b. Rūzbihān Khunḡī's Tārḡ-i 'ālam-ātrā-yi Amīnī*, V. Monorsky (tr.), London, 1957 (reprint, 1992). (*Amīnī*)
- Ḥasan Beg Rūmlū, *Aḡsan al-tawārḡ*, 'A. Nāwā'ī (ed.), Tehran, 1357/1979. (*Aḡsan*)
- *A chronicle of the early Šajfawīs : being the Aḡsan-i-Tawārḡh of Ḥasan-i-Rūmlū*, 2 vols., C. N. Seddon (tr.), Baroda, 1931–1934.
- Ḥusān b. Qubād al-Ḥusainī, *Tārḡ-i tīch-i Nīzām-Šāh*, M. R. Naṡīf & K. Haneda (eds.), Tehran, 2000. (*Ḥī'ī*)
- Iskandar Beg Turkman Munšī, *Tārḡ-i 'ālam-ātrā-yi 'Abbāsī*, 2 vols., I. Afšār (ed.), Tehran, 1350/1971. (*TAA*)
- *History of Shah 'Abbās the Great by Iskandar Beg Monshī*, 3 vols., R. M. Savory (tr.), Boulder & Colorado, 1978.
- *Zail-i Tārḡ-i 'ālam-ātrā-yi 'Abbāsī*, A. Ḥwānsārī (ed.), Tehran, 1317. (*ZTAA*)
- Mīrzā Ḥasan Beg Ḡunabadī, *Rauzar al-Šajfawīya*, ġ. R. Tabāḡabā'ī (ed.), Tehran, 1378.
- Muḡammad Ma'sūm b. Ḥwāḡaḡī Isfahānī, *Ḥulāsat al-siyar : Tārḡ-i ruḡar-i Šāh Šafī Šajfawī*, I. Ahšār (es.), Tehran, 1989.
- *Hulāsat al-siyar : Der Iran unter Schah Šafī (1629–1642) nach der Chronik des Muḡammad Ma'sūm b. Ḥwāḡaḡī Isfahānī*, G. Rettebach (Übers.), München, 1978.

- Muhammad Tāhir Wāḥid Qazwīnī, *Tārīḥ-i ḡāḥān-ārā-yi ‘Abbāsī*, S. M. M. Šādiq (Hrsg.), Tehran, 2005. (AN)
- Muhammad Yūsuf Wāliḥ Līsfahānī, *Huld-i barīn*, M. H. Muḥaddīfī (ed.), Tehran, 1372.
- *Īrān dar zabān-i Šāh Šāfi wa Šāh ‘Abbās-i duwum* (1038–1071 H. Q.) : *Huld-i barīn*, M. R. Naṣrī (ed.), Tehran, 2001. (*Huld*)
- Mullā Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī, *Tārīḥ-i ‘Abbāsī yā riżnāma-i Mullā Jalāl*, S. Wāḥid-niyā (ed.), Tehran, 1366/1987.
- Qāṣi Aḥmad Gaffār Qazwīnī, *Tārīḥ-i ḡāḥān-ārā*, Ḥ. Narāqī (ed.), Tehran, 1342/1963.
- Qāṣi Aḥmad Qunī, *Hulāṣat al-tawārīḥ*, 2 vols., I. Iṣrāqī (ed.), Tehran, 1359–1362. (*Hulāṣat*)
- *Die Chronik Hulāṣat al-tawārīḥ des Qāṣi Aḥmad Qunī : Der Abschnitt über Schah ‘Abbās I*, H. Müller (Hrsg. & Übers.), Wiesbaden, 1964.
- *Die frühen Safawiden nach Qāṣi Aḥmad Qunī* (Islamkundliche Untersuchungen 5), E. Glassen (Hrsg. & Übers.), Freiburg, 1970.
- Wālī-Qulī b. Dāwūd-Qulī Šāmlū, *Qīyaṣ al-ḥuqānī*, 2 vols., Ḥ. Sādāt-i Nāṣirī (ed.), Tehran, 1992–5. (*Qīyaṣ*)
- Zain al-‘Ābidīn ‘Abdī Beg Šīrāzī, *Takmilat al-alḥbār*, ‘A. Nawā’ī (ed.), Tehran, 1369/1990.
- Ｊ・シヤルタン (岡田直次訳) 『ペルシア王スレーマンの戴冠』(東洋文庫 七四九) 平凡社、二〇〇六。

参考文献

- Axworthy, M., *The sword of Persia : Nader Shah, from tribal warrior to conquering tyrant*, London, 2006.
- Babaie, S., “Building on the Past : the Shaping of Safavid Architecture, 1501–76”, in J. Thompson & Sh. R. Canby (eds.), *Hunt for Paradise : Court Arts of Safavid Iran 1501–1576*, (New York & Milan : Skira, 2003), pp.27–47.
- *Isfahan and its Palaces : Statecraft, Shi’ism and the Architecture of Conviviality in Early Modern Iran*, Edinburgh, 2008.
- Calmand, J., “Shi’it Rituals and Power II. The Consolidation of Safavid Shi’ism : Folklore and Populer Religion”, in C. Melville (ed.), *Safavid Persia : The History and Politics of an Islamic Society* (Cambridge : Tauris, 1996), pp.139–190.
- E. Echraqi, “Le Dār al-Salṭana de Qazwin, deuxième capitale des Safawides, in Ch. Melville ed., *Safavid Persia*, London & New York, 1996, pp.105–115.

- Kleiss, W., "Die safavidsche Sommerresidenz Farahabad am Kaspischen Meer." *Archäologische Mitteilungen aus Iran* 15 (1982), pp.347-360.
- Lambton, A. K. S., "Marāsim : 3. In Iran" in *EI*², VI, Leiden, 1991, pp.521-529.
- Melville, Charles, "From Qars to Qandahar : The itineraries of Shah 'Abbas I (995-1038/1587-1629)", in Jean Calmard (ed.), *Etudes Safavides*, Paris-Téhéran, 1993, pp.195-225.
- Newman, A. J., *Safavid Iran : Rebirth of a Persian Empire*, London-New York, 2006.
- Porter, Y., "Les jardins d'Asrafi vus par Henry Viollet", in *Sites et monuments disparus d'après les témoignages de voyageurs*, Bures-sur-Yvette, 1996, pp.117-138.
- Szappe, M., "Palais et jardins : Le complexe royal des premiers safavides à Qazvin, milles XVI^e - début XVII^e siècles." *Res Orientales* III (1996), pp.143-177.
- 奥美穂子「オスマン帝国における「王の祝祭」像の再構築に向けて」『明大アジア史論集』第13号 (2009)´ pp.111-125.
- 後藤裕加子「サファヴィー朝ムハンマド・フターバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』第61号 (2004)´ pp.20-46.
- 後藤裕加子「宮廷儀礼としてのノウルーズー16世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル朝宮廷の比較から」『人文論究(関西学院大学文学部)』55 : 2 (2005)´ pp.94-110.
- 後藤裕加子「サファヴィー朝年代記とトルコ暦(十二支)の導入」『東洋史研究』66 : 4 (2008)´ pp.50-82.
- 羽田正「メイダーンとバーグーシャー・アッバスの都市計画再考」『京都橘女子大学研究紀要』第14号 (1987)´ pp.336-318
- 羽田正「1676年のイスファハーンー都市景観復元の試み」『東洋文化研究所紀要』第118号 (1992)´ pp.183-235.
- 羽田正「シャルダン」『イスファハーン誌』研究ー17世紀イスラム圏都市の肖像『東京大学出版会』一九九六。
- 羽田正「サファヴィー朝とイスファハーンの栄光」、羽田 正・間野英二編、『アジアの歴史と文化』9巻 西アジア史『同朋舎』二〇〇〇年、pp.144-156.
- 羽田正「ペルシアと日本の王権と儀礼ーヨーロッパ旅行者による観察」『岩波講座 天皇と王権を考える』5 王権と儀礼『岩波書店』二〇〇二´ pp.199-220.
- 平野豊「シャー・タフマースプ一世治下のサファヴィー朝宮廷とゴム、エスファハーン両都市との戦時協力関係ーハーネ・クー

チの都市移送に関する事例研究(1)―『駿台史学』第109号(2006) pp.1-34.

平野豊「シャー・タフマースプ1世時代のイラン史研究のための基本史料」『駿台史学』第129号(2006) pp.53-81.

平野豊「エスマーイール1世の遺言と母后タージルーの政治的判断―サファヴィー朝初の王位継承を支えた二本の柱」『明大アジア史論集』第13号(2009) pp.188-210.

間野英二「十五・十六世紀、中央アジアにおける君臣儀禮―その一 會見の儀禮」『東方學』第109号(2004) pp.1-23.